

# 組織目標評価報告書（平成28年度）

部局名：

**大学院医歯薬学総合研究科 医学系  
医療教育統合開発センター**

部局長名：

**那 須 保 友**

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<b>①教育領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>①-1 目標</b>	<b>①-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>第3期中期目標・中期計画の初年度としての教育領域の目標を設定する。特に教育の質の向上と担保に際してはグローバル化に対応した種々の施策を包含・立案し推進を目指す。</p> <p>① 全学における教育研究組織改革の一環として医療教育統合開発センターの位置づけを明確化する。</p> <p>② 学びの強化のために大学院課程における教育の国際化を推進する。 従来、医歯薬系(医学部、医歯薬学総合研究科、医療教育統合開発センター、病院)が一体となり作成・実践してきた、各分野を超えて多様なニーズに対応できる医療人育成のキャリアパスに国際化の視点を積極的に導入する。具体的には授業の英語化の促進、海外派遣プログラムの立案等を行う。</p> <p>③ 医歯薬系が一体となった留学生・短期研修生の受け入れ促進： 部局におけるグローバル化に関する数値目標の達成を目指したプログラムの策定を行う。 従来、医療教育統合開発センターを中心に推進されてきたシミュレーション教育についても、グローバル化の視点をより一層加味した有機的・機能的な協力体制を構築する</p>	<p>① 従来、医療教育統合開発センターは、複数部局が関与する全学センターであったが、「全学センターのあり方について」が改正されたことを受けて、同センターのあり方について見直しを行い、同センターの位置づけを医歯薬学総合研究科の附属センターへと変更することとした。これにより、運営の責任主体が明確になり、医歯薬学総合研究科(医学部・歯学部・薬学部)を中心とする医療教育の連携をより効率的に進めていくことが可能になった。</p> <p>② グローバル化に対応して、昨年度に続きシラバスの英語化を一層充実させるとともに、授業の配付資料の英語化を進めた。英語による授業の増加を図るべく、各教員に呼びかけを行い、日本語と英語の併用授業の試行などを通じて、課題の把握に努めた。</p> <p>③ 医療教育統合開発センターと医歯薬学総合研究科等関係部局が連携し、グローバルな展開として、教育研究や教育手法を学ぶことに特化して、海外から教職員・学生を受け入れるための体制作りを行った。ミャンマーの第一医科大学、第二医科大学との交流の一環で、同国医学生を対象とするシミュレーション教育のプログラムを作成したことを皮切りに、トルコからの医学生に対して3日間コースを開催。また、ミャンマー看護大学の教員にシミュレーション教育指導向けプログラムを実施するなど、受け入れ体制を作るだけでなく、複数箇所から実際にトレーニングの受け入れを行うことができた。</p>
<b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>①-2 大学全体への貢献</b>
<p>① 英語授業数の増加 ② 留学生・短期研修生受け入れプログラム及び数の増加 ③ 海外派遣者数の増加 ④ 大学院定数の充足</p>	<p>大学としての方針である、全学センターの見直しに関して積極的に取り組んだ。グローバル化に関する大学の目標達成に関して積極的に貢献できた。</p>
<b>②研究領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>②-1 目標</b>	<b>②-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>第3期中期目標・中期計画の初年度として研究領域の目標を設定する。特に、大学としての組織目標である、研究大学「岡山大学」の構築を先導的に牽引するための種々の施策を策定する。</p> <p>① 医療法上の「臨床研究中核病院」認定に向けて病院と緊密に連携する。</p> <p>② 「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」の最終年度として事業の推進を加速しつつ拠点としての自立化対応を強化させる。学外シーズの発掘・支援をより積極的に進める。後継プログラムが国において新たに策定される場合は継続して拠点となるよう努める。</p> <p>③ 外部研究資金等の獲得の推進。各種競争的資金の獲得支援を病院と一体となり実施する。</p> <p>④ 産学官連携活動の推進：研究推進産学官連携機構医歯薬系本部の活動強化</p> <p>⑤ 医歯薬系研究開発委員会の改組・再編： 上記①～④の取り組みを有機的かつ効率的に実施するため、またグローバル化に対応するために実施する。</p>	<p>① 本学の組織目標にも掲げる「研究大学「岡山大学」の構築」を目指し、「革新的医療技術創出拠点プロジェクトチーム」を編成し、国際水準の臨床研究等の中心的役割を担う病院としての医療法上の「臨床研究中核病院」認定に向けて、病院と緊密な連携のもと、取り組んで来た結果、晴れて「臨床研究中核病院」名称承認を成し遂げた。特に、特定臨床研究における能力要件の基準値である論文数の目標達成については、本プロジェクトに携わる教員の研究力を集結させた成果であり、本学の研究力の高さを証明するに足りる多大なる成果であった。</p> <p>② 「臨床研究中核病院」「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」は、本研究科及び大学病院の目的・目標に掲げる両輪である。「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」については、「臨床研究中核病院」同様、「革新的医療技術創出拠点プロジェクトチーム」を中心に拠点としての自立化と共に後継プログラムの採択に全身全霊で取り組んで来た。その結果、新医療研究センター・バイオバンク等の実績、自立化のプロセス、研究シーズの発掘、臨床研究中核病院としての成果等々が認められ、東大・京大と共に採択10大学に中四国の中で唯一選ばれた。また、研究シーズの発掘・支援に関しては、新規・継続を含め、応募シーズ数は年々増加しており、特に拠点外応募は、平成27年度に比べ1.5倍に伸びており、手厚い支援体制が拠点外に行き届いている証明でもある。</p> <p>③ 外部研究資金等の獲得、産学官連携活動の推進といった目的・目標の達成を目指すため、研究力・開発力の強化を図り、戦略的方策を企画・立案し、方策実行を推進する組織として、従来の研究開発委員会を改組し、新たに医歯薬系等研究開発戦略委員会を研究科長就任に併せて、いち早く設置した。本委員会では、新研究テーマの構築や文理融合型研究テーマの開発等を目的とした「ブレインストーミング2016 in Carillon House」の開催、科学研究費研究計画調書の添削指導、研究指標データ策定、各種競争的資金への公募を目的とした研究プロジェクト編成、革新的医療技術創出拠点プロジェクトチームとの連携等々有機的・効率的且つ具体的な取り組みを行い、科研費等外部資金の確実な獲得に繋げている。</p>
<b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>②-2 大学全体への貢献</b>
<p>① 特定臨床研究に関する論文数の増加 ② 橋渡し拠点において支援するシーズ数、学外支援施設の増加 ③ 特許申請数の増加 ④ 外部研究資金の獲得件数と金額の増加</p>	<p>医療法上の臨床研究中核病院の承認、第3期橋渡し拠点事業への採択は研究大学としての活動を推進する本学にとっては特筆すべき成果である。</p>
<b>②-3 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>②-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>
<p>① 特定臨床研究に関する論文数の増加 ② 橋渡し拠点において支援するシーズ数、学外支援施設の増加 ③ 特許申請数の増加 ④ 外部研究資金の獲得件数と金額の増加</p>	<p>それぞれおのおの達成され、その結果医療法上の臨床研究中核病院の承認、第3期橋渡し拠点事業への採択に至っている。</p>

③社会貢献(診療を含む)領域	自己評価
<p><b>③-1 目標</b></p> <p>第3期中期目標・中期計画の初年度として社会貢献領域の目標を設定する。</p> <p>①おかやま地域発展協議体への医療系としての積極的かつ主体的参画</p> <p>②国立六大学によるグローバル教育・研究の充実・強化への積極的かつ主体的参画：ミャンマー医療人材育成支援のためのプログラムに積極的に参加する。</p>	<p><b>③-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b></p> <p>①おかやま地域発展協議体の運営に委員として参画し、国際学都シンポジウムの開催等に尽力したほか、医療系分野における産学官連携の可能性について検討を行った。</p> <p>②国立六大学連携コンソーシアム及びJICAと連携して、「ミャンマー医学教育強化プロジェクト」に主幹校として参画し、実質的な運営を担っている。基礎系分野では、昨年度から博士課程留学生2名(現在2年生)を受け入れている。臨床系分野では、昨年度に引き続き、今年度も救急科で臨床修練医2名の短期研修を受け入れた。同プロジェクト以外では、本学独自の取組として、ミャンマーの協定校から、博士課程留学生3名を新たに受け入れた。</p> <p><b>③-2 大学全体への貢献</b></p> <p>病院と協力して積極的な取り組みを行っており、大学全体の方針に大いに貢献している。</p>
<p><b>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>①おかやま地域発展協議体における医療系課題の提言数</p> <p>②ミャンマーよりの医留学生・短期研修生受け入れ数の増加</p>	<p><b>③-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b></p> <p>①革新的医療技術創出拠点を活用したプログラムを提案</p> <p>②博士課程留学生5名(うち2名はH27年度入学)、臨床修練医2名を受け入れた。</p>
<p><b>【総括記述欄】</b></p> <p>教育・研究に関しては大学・部局の組織目標を十分達成しているといえる。特に革新的医療技術創出拠点の核となる医療法上の臨床研究中核病院の承認、第3期橋渡し拠点事業への採択は特筆に値する。今後の大学院教育、社会貢献については、その拠点における活動と密接に関連して実施されていくことで、組織目標達成が大いに加速されていくと考えられる。部局間の連携特に、病院との連携体制が良好であることが目標達成の大きな要因であった。今後は他の部局との連携をさらに緊密化していくことの重要性が改めて認識された。</p>	